

5 腹膜透析患者における腹膜透析排液中白血球

分画の臨床的意義

統合検査室一般検査課

○大沼栄子, 横山 貴

【はじめに】腹膜透析 (CAPD) の合併症として腹膜炎があげられ、時として腹膜透析を中止せざるをえない場合がある。腹膜炎を診断するためには、CAPD 排液中の血球系有核細胞数 (NCC) や白血球分画を行うことが有用とされている。しかし、資料や文献が少ないことや白血球分画については行われていないのが現状である。今回、われわれは NCC を細胞数により 3 群に分類し、さらに白血球分画を行い各群の平均値を算出し病態との関係を検討した。

【対象】当一般検査室課に提出された CAPD 排液で白血球分画まで依頼があった 275 検体を対象とした。

【方法】

1. サムソン液を用いて Fuchs Rosental 計算盤で NCC ($/\mu\text{L}$) を求めた。
2. NCC を I 群 $0\sim 49/\mu\text{L}$, II 群 $50\sim 99/\mu\text{L}$, III 群 $100/\mu\text{L}$ 以上の 3 群に分類した。
3. 各検体をサイトスピンで塗抹標本作製しメイ・ギムザ染色を行った。
4. 各検体について白血球分画を行い、好中球, 好酸球, 好塩基球, リンパ球, マクロファージの割合を算出した。
5. NCC 群別に白血球分画の平均値を算出した。

【結果】NCC 群別による白血球分画の平均値は、I 群 (好中球 19.9% 好酸球 5.6% 好塩基球 0.7% リンパ球 40.9% マクロファージ 32.9%), II 群 (好中球 37.9% 好酸球 5.9% 好塩基球 0.8% リンパ球 32.5% マクロファージ 22.9%), III 群 (好中球 62.4% 好酸球 4.2% 好塩基球 0.7% リンパ球 17.3% マクロファージ 15.4%) であった。

【まとめ】

- ① NCC 群別による白血球分画の平均値を算出することによって、基準値を設定することができた。
- ② NCC と白血球分画をおこなうことによって、CAPD 患者の病態を把握できる可能性が示唆された。

6 ペースメーカー機能不全における単極・双極リ

ードと感度の関係 ～ホルター心電図を用いた検討～
中央検査部心電図室¹, 循環器内科²

○市川 篤¹, 山田 辰一¹, 立田 顕久¹, 小原義宏¹,
小村智子¹, 小島幸子¹, 佐藤 良夫¹,
萩原誠久², 笠貫 宏²

【目的】ペースメーカー機能不全にはペーシングリードの種類 (単極・双極) や感度設定が密接に関わっており、単極リードにおいては、胸部筋電位や外部の電磁干渉を受けやすく、オーバーセンシングを起こしやすいことが知られている。そこで今回、ペーシングリードの種類とオーバーセンシング出現率および感度設定の関係について、ホルター心電図を用いて検討したので報告する。

【対象および方法】対象：2000 年 1 月～2000 年 6 月の間に当院にてホルター心電図を施行した 3100 例中、心室リードを挿入したペースメーカー植え込み患者連続 148 例。方法：Marquette 社製 LASER SXP、Mars8000 にてホルター心電図解析を行い、単極リード群 (U 群)、双極リード群 (B 群) 別にオーバーセンシング出現率、感度について検討した。また、U 群を更に、感度 3.5mV 以上、3.5mV 未満、自動感度調節機能を持つ群の 3 群に分け、オーバーセンシング出現率を検討した。

【結果】表に示す。

【結語】①オーバーセンシングは双極リード群では認められず、単極リード群で 30.8% に出現したが、両群間の感度設定に有意差はなかった。②アンダーセンシングは両群とも約 6% に出現したが有意差は認められず、9 例中 7 例は心室期外収縮のアンダーセンシングであった。③単極リード群において設定感度 3.5mV 未満の群ではオーバーセンシング出現率は 45.1% とより高率に認められた。④単極リード使用例では細かな感度調節とフォローアップが必要であると考えられた。